

有明海再生赤潮モニタリング委託事業

冬季の有明海佐賀県海域における植物プランクトンの出現状況等のモニタリング

岩永卓也・太田洋志・藤武史行・三根崇幸

有明海におけるノリ色落ち原因珪藻の発生シナリオの構築および赤潮発生予察技術開発の検討に資するため、冬季の有明海佐賀県海域における植物プランクトンの出現状況等の調査を実施した。なお、本課題の詳細については、「令和2年度漁場環境改善推進事業のうち栄養塩、赤潮・貧酸素水塊に対する被害軽減技術等の開発 (2)赤潮被害防止対策技術の開発報告書」で報告した。

方法

図1に示すSt. P1, P6, T2, T3 および T13 の計5定点において、2020年10月から2021年2月まで月2回の頻度で調査を実施した。調査項目は、表層における植物プランクトン細胞密度および栄養塩濃度(DIN) とした。

結果

珪藻類の細胞密度の推移を図2に示した。珪藻類は、0～15,070 cells/mLの範囲で推移した。10月22日に *Skeletonema* 属および *Chaetoceros* 属、1月21日、2月5日および2月19日には *Skeletonema* 属および *Pseudo-nitzschia* 属の珪藻赤潮が確認された(データ未記載)。

DINの推移を図3に示した。DINは、0.0～19.0 μ Mの範囲で推移した。St.P1およびP6では概ね10 μ M未満であった。一方でSt.T2, T3およびT13では10月8日から1月4日までは概ね10 μ M以上で推移したが、1月21日はDINが3 μ M以下まで著しく低下した。その後、2月5日のSt.T2を除いて概ね10 μ M未満で推移した。

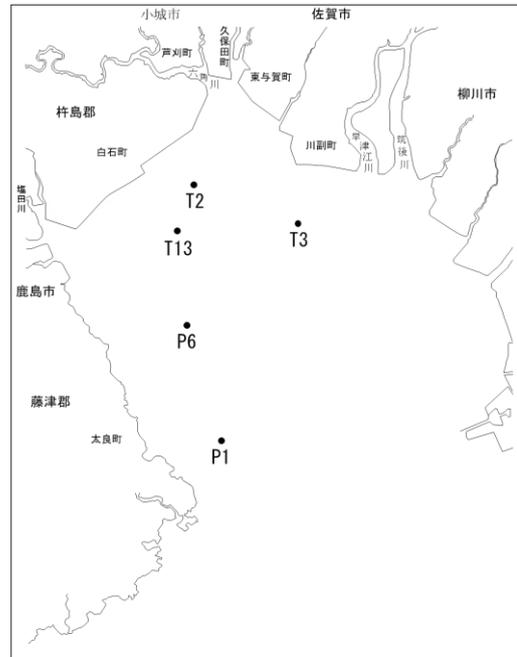


図1 観測地点

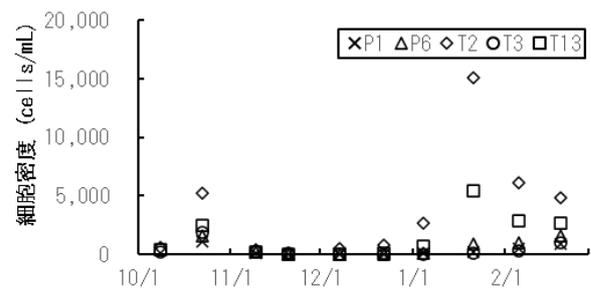


図2 表層における珪藻類の細胞密度の推移

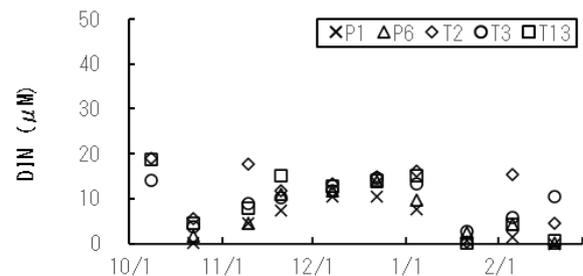


図3 表層におけるDINの推移